

景色が移り変わるホテルのような

ハンチングにハーフコート姿の野村佐紀子さんが、銀色に光るスーツケースを転がして JR 東京駅に現れたのは、寝台特急「はやぶさ」の発車時刻（18時3分）まで1時間を余す薄暮のころ。

さっそく百貨店の総菜売場へ直行すると、弁当、酒肴、デザート、朝食、ワイン、焼酎、さらにはウイスキーまで抱え込む。師匠ゆずりの「イケるクチ」だ。

乗り込んだ「はやぶさ」には A 個室と B 個室、2段ベッドが向き合う B 寝台の3タイプの客室があり、シート兼ベッドの上に糊のきいたシーツ、毛布、枕、浴衣、衣紋掛けがセットされ、ちょっとしたホテルの部屋に入室した気分。「切符を拝見」に現れる乗務員の物腰にも、ベテランのホテルマンを思わせる温かさがあり、旅の一夜を見守ってくれそうな安心感がある。

しかしホテルと違って列車の窓は景色が移る。A 寝台個室に入った野村さんは部屋着に着替えるとワインとカーテンをあげ、流れゆく車窓の夜に、そして初めての寝台特急の旅に、祝杯をあげた。

こうしたプライベートな悦楽こそ寝台特急の魅力。ところがあえて B 寝台を選ぶ乗客もいる。ビデオをまわしていた中年男性がその心情をこう話す。「窓が広くて、通路側の景色も見える。開放感を求めるならだんぜん B 寝台ですよ」

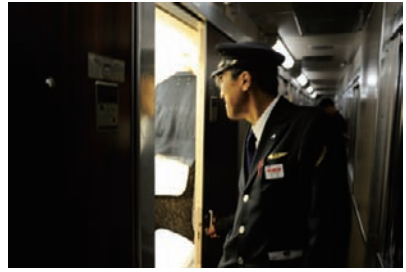
どうやら鉄道ファン、つまり「鉄ちゃん」らしい。「鉄ちゃんには乗るタイプと撮るタイプがいて、ぼくはそのどちらでもない。あと録音する人もいるかな。車内放送や放送前に流れる音楽、振動音やそこに重なる汽笛。とにかく音がたまらない人たちです」

本人は否定するが、言動は間違いなく鉄ちゃんのそれだ。列車はいろんな楽しみを乗せ、走っていく。

揺れつつ「闇」を撮る鉄子さん

深夜、ライカを手に個室を出た。乏しい光源をモノともせず被写体に肉薄、フィルムに極限を超える冒険的増感現象を施し、ブレや粒子の荒れの中に情感を定着させるのが野村さんの写真。車体の振動や眠りを妨げない薄い灯りは、まさにその世界にふさわしい。

23:21▶



◀23:37



23:50▶



◀00:00



日付が変わるころ、
列車は滋賀県稲枝駅付近を走行中

16:54 東京駅デパ地下の総菜売場で食料を買い、ホームへ。

車両は「富士」と「はやぶさ」の12両編成寝台車。

18:03 「はやぶさ」2号車A寝台乗車。さっそく車内散策。

21:08 窓辺の補助椅子は絶好のビューポイント。

22:45 ホテルの一室のような個室寝台でくつろぐ。

23:21 乗務員から車内の案内をうけ、本格的に車内探索へ。

23:50 灰皿（禁煙車両は使用不可）に国鉄のマークを発見。

寝台特急「富士」「はやぶさ」は2009年3月14日のダイヤ改正に伴い、廃止されます。

写真家

野村佐紀子

寝台特急「富士・はやぶさ」に乗り 下関へ帰郷す

初めて乗っても懐かしい寝台列車の旅……。じよじよに遠ざかり、
ようやくにして近づく、距離と時間が綾なす心の旅が展開する。

アラキーこと荒木経惟氏を師匠にもつ写真家・野村佐紀子さんが、
東京を発ち下関へと到る、14時間半をかけた帰郷のドラマ。
その車中一夜の情景をお届けしよう。

写真・文 大野金繁

18:15▶



20:59▶



21:08▶



22:45▶



◀ 22:54



16:54▶



◀ 17:34

18:03▶



東京駅を発車！